AMEN―アーメン―

梓川深屑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＭＥＮ―アーメン―

【Ｎコード】
Ｎ４０２７Ｗ

【作者名】
梓川深屑

【あらすじ】
高校２年生・羽柴理久と周りの人達との関わりをテーマにしたオハナシ。
過去のトラウマで、他人を傷つけるのを怖がる理久は、髪を染め、周囲に壁を作る。
しかし目つきの悪さと髪の色、それに加えて頭は悪くないため、喧嘩を売られる日々。そんなある日、一人の少年との出会いが理久の周囲を変化させていく。

ハジマリ。（前書き）

人は誰かによって変われるし、救われる。

このオハナシは大分前に書いたもので、文章も拙いし、何より綺麗事が多いと思います。だけど登場人物への思い入れはものすごく強く、初めて最後まで書き切ったお話です。

綺麗事で拙いこの話の中に、何か心に残せたらなと思います。

なお、他作品の短編「淋シキ人間ノ愛唄」中に関連の作品があるので、ぜひ探してみてください（^＿^）

それでは、「ＡＭＥＮ」、よろしくお願いします。

ハジマリ。

―この騒音ばかりの世の中で　小さく震える孤独の音が　君にはきこえてますか？―

＊ ｡｡・ ｡ ・＊ ｡・・ ｡ #・ ｡｡ ＊・ ｡ ｡：

東京の賑やかな駅前に
赤い屋根の小さなお店がある。
周りの色鮮やかで華やかな店に挟まれるように、でも満足そうにそこにあった。
通り過ぎる人々は、その小さすぎる店には目もくれない。
生きる理由もわからぬまま、ひたすら足を動かす。
空はこんなにも青いのに、高いビルがそれを隠すように立っている。

車のクラクション
ビルについてるでっかい画面。人の声。

すべてが重なり、混ざり合い、騒音となる。

「今日も賑やかだな…」

小さなお店の丸窓から外を眺める一人の女。
長い黒髪を指でいじり、
ぼんやりと過ごしていた。

｡：＊｡・ ｡#・｡｡'｡ ｡・＊｡・ ｡：#

ソラとリク（前書き）

よろしくお願いします？？

ソラとリク

「ゲホッ……」
口いっぱいに鉄の味。
気持ち悪……。
「――何だってんだよ」
あまりの理不尽さに呟く。腕、肩、腹、足、その他もろもろ。
鈍い痛みがじんわりと広がる。
今日は五人だったな。
先週よりマシ、か。
腕時計を見る。
午後1時53分を指していた。授業はもう、とっくに始まっているだろう。

「……は―」
自分は一体、何をやっているのか。
体をコンクリートに預ける。ここは屋上だから、真っ青な空が視界いっぱいに―というか空しか見えなかった。
綺麗、だと思う。
だけどそれだけだ。その事実は、決して俺の中を満たすことはない。
ただ、自分の感情の扱いが分からなくなった時は、こうして何も考えずにいれば楽だった。
わずかだが、自由な時間。
いつもはここで、一人のまま時間が流れていき、次の授業には教室へ戻るといった感じなのだが……今日は違ったようだ。

「あっれ――、先客―？」
だるそうで、それでいてやや棒読みの喋り方。

栗色のふわふわした長めの髪で、１８０はあるだろう身長。同じクラス…だと思う。
名前はわからない。覚えるつもりもないけど。

「……」
目が合った。
突然そいつがへらっと笑ったかと思うと、そのまま地面にぶっ倒れた。
「……おい、」
返答はない。
恐る恐る近づいて脈を確かめる。
死んではないようだった。しょうがないので俺はそいつを担ぎ、保健室へ向かった。
俺より大分背があるにもかかわらず、不思議なほどに軽くて、運ぶのは容易なことだった。

「…空腹と寝不足と疲労ね、原因は。
てか羽柴、今授業中だろ。なんか血ぃでてるし。喧嘩もいいけどとりあえず授業には出とけな。後々不便になるから」
全く保健医らしくも女性らしくもない喋り方で、彼女、葛村綾乃は言った。
面倒くさそうな態度を隠そうともしない。それに加えて見た目の派手さだ。他の先生からの風当たりは相当なものらしい。だが生徒からの評判は悪くはない。歯にモノを着せぬ物言いが、返って親近感が湧くようだ。今こうして話すのも初めてな俺は、よくわからないけど。
「別に好きで喧嘩してるわけじゃないですよ。向こうから一方的に来るだけ」

「…ふーん」
マスカラで華やかに飾った目が、意外そうに開かれた。
「ねぇ、オレンジ頭の超不良男子・羽柴理久って本当にあんたのこと？」
「あー…多分そうですね」
「すっげー有名人になってんのな。３秒間目合わせたら殺される、とか」
「……殺す……？」
くだらない。
「ま、とりあえず顔出しな。そんな顔で戻ったら余計怖がられる」
言いつつカラカラと笑う。美人のくせに、笑い方はまるで子供だった。
「いえ。いいです俺は。…失礼します」
「そ？ならいいけど。
お前本当、サボり過ぎんなよ。あと眉間！皺寄ってて怖すぎ」
「？はぁ、」
そんなもんか？

ガラッ。

教室のドアを開けると、一気にざわつきが収まった。もう慣れたものだが、相変わらず気分が悪い。
やっぱり、課外必修クラスなんか止めておけばよかった。一瞬の沈黙の後、パラパラと話す声が聞こえてくる。嫌でも耳に入ってくるこの声たちが、俺は嫌いだ。
「羽柴だ…」
「あの怪我、また喧嘩かよ…」

「そういえばこの間のテスト、校内トップだったよね―すごいなぁ」
「でもさあの髪、嫌な感じだよな」
「やっぱ家の格が違うし？調子乗ってんだよ」「いいなー」
「やめろよ。聞こえるって」
全部聞こえてる。
家の格？
親が弁護士だからって、そんな変わるものか？
調子乗ってるわけでもないんだけど…

軽く目眩と吐き気がする。…気持ち悪い。
いい加減慣れたらどうかと思う。もう夏も終わりに近いんだし。
けれど胸の中を渦巻くこの気持ち悪さは無くならなかった。
悲しくなんかない。本当に。
ただ哀れなだけ。
自分？他人？
いや、多分どちらもだ。
人間なんて一人で生きて行けるくせに、回り道ばっかして、愛情に甘えて、誰かに寄り添ってもらわなきゃ歩くこともできないんだな。
愛されたいと泣きわめく、ただの子供。
愚かで哀しくて儚くて弱くて。
綺麗事が正しいものであって欲しいと、さ迷い続ける。
道徳的には非難されるだろうか。
死にたくなったら死んでもいいと思う、なんて言ったら。
本人が望んでいるなら他人がどうこう言う必要なんて何処にもないと思うんだけど。
俺は死ぬ理由がないから
今こうして生き続けてる。でも、ただ生きてるだけじゃ足りなくて。

2分後、先生が来て授業が始まった。

いつも通りぼんやりとノートをとり、問題を解く。
指名されて黒板に書いた答えに丸がついた。
なんか褒められたかもしれなかったが、無機質な丸が俺を嬉しがらせてくれない。
かと言って、悲しくもなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「「あ、」」

放課後、帰ろうと下駄箱にたどり着いた時、ちょうど靴を履いて出て行こうとする栗色フワフワ頭が視界に入り思わず声を上げた。
それは向こうも同じだったらしい。

「昼間の恩人さん……？」
表情一つ変えず、声のトーンも一定だった。
よくよく見てみると、いやに色白で綺麗な顔をしている。女子なら皆好きそうな。
「その節は、どーもありがとう。どうやら空腹だったらしく意識がぶっ飛んだよーです」
「………別にいいけど。それじゃ」
立ち去ろうと背を向けると、そいつはやはり一定のトーンで
「ちょい舞って。あ――、え―と、ハトバリク君？俺、2年3組の蒼井想羅とゆー者です。今後ともよろしく」
「……〝羽柴〟理久なんだけど」
「やだな――、冗談に決まっててんじゃゃん」

なんだコイツ。

へらへらしてて変な奴。ってか同じクラスだし。
ボケてんのか？
いちいち語尾伸ばすのがカンに障る。

「バーイバーイ……」
にこりともせず手を振る蒼井想羅に俺は「ん」と一言言って昇降口を出た。
辺りは明るいオレンジ色で染まっていて、俺は全身オレンジ色になってしまった。この高校に入学してきた頃を、ふと思い出す。
髪はまだこんな色ではなかった。元々茶色っぽかったけど、わざわざ目立つほど明るくしたのだ。
…目立つため。そのためだけに。

何の気もなしに、出たばかりの昇降口に視線をやる。”蒼井想羅”はまだそこに立っていた。
目が合う。

蒼井は、何？と言うように首を傾ける。
俺は気まずさで、すぐに前を向き直し、一度も振り返ることなく歩きはじめた。

＊＊＊＊＊　＊　＊　＊　＊

「――羽柴理久、くん。
夢愛さんが好きそうだな―」

夕日に混ざった少年を見て、呟いた。

家とサンマと黒い女（前書き）

羽柴家登場。
あと、結構な重要人物も。

家とサンマと黒い女

「お帰り―…ってあんたまた喧嘩！？」
家へ帰ると、なにかが焦げる臭いと母親のやや笑いを含んだ怒り声がした。
今日も家にいたのは母と妹だけだった。
父は仕事が山のようにあるから、当然なのだが。
「あんたももうちょっと愛想よく笑うなら、喧嘩なんか吹っかけてこないんじゃない？
ま、そういうわけで理久！スーパーで秋刀魚三匹買ってきて！」
「……なんでそーなる」
帰ってくるなりこうだ。
料理が破滅的にできないくせに、母はやろうとする。
「お兄ちゃん…お腹空いた……」
リビングからトテトテと5歳の妹がやって来て、俺の足にしがみつく。
泣かれると面倒だ。
しょうがない…。
「……秋刀魚三匹だけ？」
渋々言う俺を見て、母は満足げにニヤリと笑う。
なんかムカつく…
「あとはー、キャベツとニンジンと、あ、そうだ缶びーる！それぞれ一個ずつ買ってきて！はい、これで足りるだろうからお願いね」
渡された千円札をポケットに押し込み、一応自分の財布も持って再び家を出た。それにしても…
あの料理オンチ。
料理は俺が作るって言ってんのに。

毎回炭にされる食べ物がかわいそうだ。

スーパーまでは徒歩１０分。走れば5分ちょっとで着いてしまう。
毎朝通勤・通学ラッシュで賑わう駅も、そのスーパーの近くにあった。
駅の横を通り過ぎようとした時、異様な人を見た。
夏が終わりに近いとはいってもまだまだ暑いこの中、真っ黒なロングコートを羽織り、小さな木の椅子に両膝を抱え頭を埋める、ほっそりした女がいた。
艶やかな黒髪が無造作に縛ってあった上に、その黒髪が異常なほど長いので、彼女は本当に真っ黒だった。唯一黒でないものは、大振りでキラキラと輝く髪飾り。
太陽の光に照らされて、女は消えそうだった。
スーパーへ行くにはこの道を通らなければいけないのに、なんだか少し怖くてしばらく動けずにいた。

「ゆーあーちゃんっ。
ゆあお姉ちゃん！！」
スーパーの方向から小さな足音を立てて、髪を二つに結わえた女の子がやって来て、女に抱き着いた。
「ん……あぁ美優ちゃんか。おはよ」
「もーっ、ゆあちゃんったら！今は朝じゃないよ。
だめでしょ、こんな所で寝てちゃあ」
可愛らしく怒る女の子の頭を、女は不器用な手つきで優しく撫でた。
「うん、ありがとうね。
今日も……いつものでいい？」
「うんっ」
とてもゆっくりとした動作で椅子から立ち上がり、女の子の手を引いて、赤い屋根の小さな小さな家に入って行った。

一瞬ちらりと目が合った気がしたが、気のせいだったらしい。
パタン、と音を立ててドアが閉まった。
「……やべ、秋刀魚買わなきゃ」
早足でその家の前を通り過ぎた。
思わず見てしまった赤い屋根の看板には、消え入りそうな字で
”Ａｍｅｎ―アーメン”
と書かれていた。

スーパーで買った秋刀魚は無事に俺が焼き、少し遅めの夕食になった。

今日はやたらと変人に会うな、とぼんやり思いながら寝床に着いた。

ガーリックトースト

翌朝、教室にて

「うわー、ハトバ君て同じクラスだったんだ。
びっくりした――」
「……あぁ、」
全然驚いているように聞こえない声で蒼井想羅は言った。しかもまた苗字間違えてるし。
嫌がらせだろうか。
そのまま無言で自分の席に着き、しばらく静けさが続いたが、やがて続々とクラスの連中らが集まってきた。

「蒼井ー！昨日の午後の授業、なんで出なかったんだよ―。お前いなかったから俺が当てられたじゃんか！」
何となく視線をそちらに向けてみると、蒼井想羅は何人かの友達に囲まれ、雑談をしているらしかった。
変人でも友達はいるのだと、なんだか不思議だ。

「それに女子は、”授業中寝てる蒼井君見れなかった～”って騒いでたぞ。
…きれーな顔しやがって！コノヤロウ！！」
「へ――、すごいねぇ―……あーお腹空いた。
何か持ってない？」

すごい。見事に会話が成り立っていない。
さすが変人。
人気者なのに、変人。いや、変人だからこそ？
「――昨日もおなか減りすぎて、なーんか俺倒れたらしい。んで、

それを助けてくれた命の恩人さんがいたんだよ」
「はぁー？！マジかよ！
つか誰だよ、お前拾ってくれた超親切な奴って？」
え……。

「うんと、……ハトバ君」
また間違えてる。
記憶する気がないんだろう、コイツは。
何となく、周りの空気が代わった。

「ねーハトバ君。なんか食べるもんない？
俺、また倒れそうなんだけど」
周りがとうとう確信したらしい。
蒼井が言っているのは、”あの”羽柴理久なのだと。
「蒼井、命の恩人って……羽柴？」
一瞬きょとん顔になって
「ああ、そうだ。ハシバ君だ」
ざわつき始める周囲に、何故コイツは気づかない。
「蒼井」
耐え切れなくなったのと面倒くさくなったのは、多分半々くらいだったと思う。
「――ふがっ」
今日の昼食の予定だったカレーパンを、容赦なく蒼井の口へ突っ込んだ。
「それ、やる。だから、もうあっちいけ」
微妙な空気が流れ、そのまま担任が来たので、ホームルームが始まった。
蒼井想羅は気にせず、カレーパンを幸せそうに咀嚼していた。

＊　＊　＊　＊

１時間目が過ぎ、２時間目が過ぎ、そして３時間目、４時間目が過ぎた。
いつも通りに、淡々と過ぎていった。

教科書、ノート、その他色々を無理矢理机に押し込んでいると、
ガンッ、　と扉を苛立ちに任せて開ける音が響いた。
教室が静まり返る。
開いた扉から、３人の体格の良い男子と、頭の良さそうな顔をした男子が入ってきた。
見覚えがあるのは確かだった。
そいつらは、わざわざ俺の席まで来て、椅子に座る俺を上から見下ろした。
いきなり髪を捕まれた。

「よくこんな頭で、成績優秀なんて言われてるよなぁ…？」
「余裕ぶっこいてんじゃねーよ。いつも人のこと見下してるような目ぇしやがって！―だから、そーゆー目がムカつくんだよ！！」

ガァァァンッッ

４人のうち１人、坊主頭の奴が机を蹴っ飛ばした。
机は中のものを全て吐き出し、無惨にも倒れ、周りの机や椅子を巻き込んだ。逆ギレ、か。

「――――それだけ？」
「は？」
女子たちが小さな悲鳴を上げ教室を出ていく。
坊主頭と対峙する。

まったく、でっかい図体して中身は小学生以下なんだな。
自分の怒りがコントロールできなくて、他人にぶちまける。
人間らしくて、愚かだ。
カナシイね。
「そんなに俺がムカつくなら、堂々と殴れば？
1発でも2発でも、あんたらの好きなように」
俺は別に、顔が腫れようが、歯が折れようが別にどうだっていい。
本当にもう面倒くさい。
ほとんど毎日来る喧嘩の相手に、味気ない日々に、
騒音ばかりの世の中に、呆れた。
呆れては”もっと”と、何かを求めた。
この退屈を埋めてくれる何かを、ずっとずっと待ち続けていたんだと思う。
坊主頭が顔を真っ赤にし、とても悔しげな顔になった。
髪を掴んでいた手に、一層力が加わる。
もうそろそろ、くるな…

「――ッ、うぜーんだよ……！！」

大きく拳を振り上げた。
その時。

「――ハトバ君、これカレーパンのお返し――――…」
緊張感がまるでない声が、静かな教室でよく聞こえた。―横、すぐ近くで。

「ガッッ」

フワリといい匂いがし、蒼井は右手に持っているパンを坊主頭の口

に押し込んでいた。

「……どう？ガーリックトーストだよ。
おいしーでしょ？」
そのままグイグイとパンを押し込んでいく。
ワックスで髪を立てている奴が、蒼井につかみ掛かった。
「なんだよ、てめぇ！」
「あれ？君もほしいの？」
「ふざけんな！！」
こんな状態でも蒼井は無表情でいた。周りが騒ぎはじめる。
「え？！蒼井君！？」
「なんで羽柴なんか…」
「大丈夫かよあいつ！」

心配する者、
訳がわからないでいる者。様々な反応だった。
そんな俺は、それを他人事のように見ていた。

「……ああ！喧嘩か―。
でもさ、殴ったらイタいじゃん。やめといた方がいいよ。
ってゆーかさー、昼食食べよーよ？」
コイツ、もしかしなくても馬鹿なのか…？
それともなんか策略でもあんのか？
普通、こんなところに割って入って来ないだろ。
自分に何の利益もない。
それどころか、今後変に目をつけられる可能性だってある。
不利益だらけだ。

「……？」
蒼井に左腕を捕まれた。

目で「立て」と言われた気がした。
「パン、おごったげる。つまんないことしてないで来て」
蒼井にしてははっきり、そして少しの命令口調。
このままここにいて、コイツらに殴られるか、蒼井にパンを驕ってもらうか。
無論、俺が選んだのは後者だ。

「逃げんじゃねぇ！！」
怒鳴り散らす坊主頭を見て、蒼井が冷たく笑った。

「あんさ、1対5ってどうなの。一人じゃ自信なくて怖いから…？」
ずっとヘラヘラしてる奴だと思っていただけに、蒼井のさっきの”笑い”は意外だった。
（……変な奴）
相手の怒りは頂点に達しているはずなのに、何も言い返さない。
いや、言いたくても言えないのだろう。
図星だったから。
俺はもう、何も言うことはなかったので黙って教室を出た。

「ね、」

横から覗き込むようにして、いつの間にか蒼井想羅が横に立っていた。

「さっきの人達、トモダチだった？」
何を根拠に言ってんだ。
天然なのか、ただの阿保なのか。

「まさか。ってかなんでお前、入ってきたんだよ」

「ん――？ハトリ君にパンを奢ないと、って思った……から？」
俺に聞いてどうする。しかもそれ、答えになってるのか？
「…俺、羽柴理久なんだけど」
「えーなにー？知ってるよー」
「”羽柴”って一度も正しく呼ばれてない」

蒼井が黙る。
瞬きを3回して、「実は…」と話しはじめた。
「俺、まったくもって記憶能力がないんだよね」
ふざけてる様子がない分、余計呆れてしまった。
そんなことは知っている。まったく……
「やだー、ハト……ハシバ君。そんな顔しないでよ。眉間にシワー……」
「うるさい。ん、メロンパン頼む」
「……」
「なんだよ、奢るんじゃなかったのかよ」
「いや、奢りますケド。
なーんか、かわいらしーの食べるんだね。は…しば君」
「そうか？」
美味ければそれでいいだろ。

「おばちゃーん、コレちょうだい」
「あらっ！！想羅くん！また来てくれたの～？嬉しいわぁ。あらあらそっちの子は可愛いわねぇ。はい、１１０円ねっ」
購買の５０代くらいのおばさん。名前は美智子……？美千代…？とにかくそんな感じ。
「あ。３０円足りない…」
じっ、と俺を見てくる蒼井。言いたいことは言われなくてもわかった。
ポケットから自分の財布を出し、足りない３０円分をおばさんな手

渡した。
引っ込めようとしたら、ガシッと手を捕まれた。
「な……っ」
シワシワであったかい手は意外にも力強く、簡単に振りほどけない。
「想羅くんのお友達よね？また来てねぇ、美味しいパンばかりだから」
惜しみ無くにっこり笑うおばさん。
どう対応すりゃいいんだ。
「はぁ～～…想羅くんは美少年でカッコイイけど、あなたも可愛い顔してるわぁ。いいわねぇ……」
可愛いと言われて嬉しいはずもなく、微妙な顔になっていたことだろう。
初対面でこんなに話されても、困るだけなのだ。どうすれば――――…
「おばちゃん。もう離したげて。困ってるカラ」「あらら、ごめんなさいね。でも本当、待ってるわ。またね！」
「……どうも」

＊　＊　＊　＊　＊
ようやくおばさんに解放され、向かった先は屋上。
風もなく、心地好い暖かさだった。
真ん中のほうまで歩いて、そこに胡座をかいて座った。しばらくして、蒼井はゴロンと仰向けに寝転がり、俺はメロンパンのビニールを破り、食べはじめた。
口の中が渇いていたからパンがパサパサで、飲み込むのがなかなか難しかったけど、黙々と無言で食べた。
「――――30円、明日返すよ」
「別に、いい」

「あ、そう？はは。そりゃどーも
コイツ、本当何考えてんだかわからない。
ふと、昨日の記憶が頭を過ぎる。
駅前にいた、あの全身真っ黒の女。
一瞬目が合ったと思うのに、時間が過ぎれば過ぎるほど、間違いだったと思えてくる。
虚ろで無関心で光を打ち消してしまうようなあの目。何故か蒼井の目と似ている気がした。

「ハ……シバ君って全然笑わないんだね――…」
いつの間にかその目はしっかりと俺を見ていて、何を言われたのかを理解するのに時間がかかった。
”笑わないんだね――…”
「…お前はヘラヘラ笑いすぎだ」
「んー、そぉなの？俺は笑いたい時に笑ってるだけだけどな――」
面白くもないのに笑う方がおかしい。
嫌々笑うんなら無愛想と呼ばれるほうがいくらか楽だし。
ずっとニコニコしてる奴を見ると、気持ち悪いとすら思える。

「……いよっと、」
蒼井が起き上がり、ちらりと俺を見た。
「ハ……ハト…あれっ？」
しばらく考えるそぶりを見せたが、何かの拍子に諦めたらしい。顔を俺に向ける。
「……やっぱ無理だ。ね、”リク”でいい？」
「……はぁ？」
「俺、名前が”ソラ”だからなんか覚えやすくてさ。
…理久、」
「なんだよ」
「――――――何言うか忘れた」

「……」

変な奴。この印象はきっと永遠モノだろうな。

「じゃあ俺、教室戻る」

「うん」

他人から見たら冷たいやり取りにしか見えない。

ただ、

蒼井想羅と羽柴理久はそういう人間だった。

Ａｍｅｎ―アーメン―（前書き）

二人の関係。

Amen―アーメン―

「あ――――…」
またこんな所で寝てる…。店も鍵かけてないし。
無用心だな――。
まだ暑いっては言っても、もう夏は終わりに近いし、夕方は多少冷えるのに。
それに、どうしてだか今日はあの暑苦しい真っ黒なロングコートを着ていない。とゆーか、七分丈のブラウス一枚って……

「夢愛さん。起きてくださーい。日が沈みますよ――…」
肩を揺する。
微動だにしない。
それにしてもなんて細い肩だろう。折れそう。
「……よっ」
仕方がないので彼女の華奢な腕をもち、店の中に連れていくことにした。
ドアを開けると、いつものように可愛らしい鈴の音がチリン、チリンと2回鳴った。
「ニャ――――」
足元で子猫が鳴く声がした。白い毛に、金色の瞳の猫。―夢愛さん、また猫拾ってきたんだ。
これで何匹目だったかな。何でもかんでも助けようとしるのがこの人だから。
一体、今までどれくらいの生き物を助けてきたんだろう。
そしてその分、どれくらいの哀しみを背負ってきたんだろう。

自分と2つほどしか離れていないこの人が、会って大分経つ俺でもさっぱりわからない。
――出会ったのはどこだったかなぁ。
たしか、あの学校の屋上だったハズ。
あの時からこの人は黒い服を着ていた。
周囲から「魔女」と言われているというのに。

「……ん…想羅か。おはよう」
「あ、起きたんですか。おはよーございます」
茶色いくすんだソファーに彼女を下ろそうとした時だった。
ぱっちりとした二重の目が、ゆっくりと開かれた。「……今何時……？」
力が無駄に入っていない、やや高めの不思議な声で聞いてくる。
窓からの西日が彼女の大振りの髪飾りに当たり、キラキラしていた。
「おおよそ5時くらいですよ、多分」
俺は時計を持っていないし、この店にも時計はなかった。時計ばかりか、レジもクーラーも、機械的なものはこの店にはない。あるとしたら、黒塗りのダイアル式電話が隅のほうに置いてあるくらい。
お金がないのだと彼女は言っていた。

「まずい。おやつの時間だ。……あれ、山田さんは？」
眠たそうに目を擦りながら、フラフラと店を見回す。
「アルバイトの人でも来てたんですか？」
「あ、いたいた。おいで、山田さん」
身を屈ませて呼ぶ先には、さっきの白猫がいた。
猫はぴたりと動きを止めて、とたとたっ彼女の胸に飛び込んだ。
「――山田さんて……？」
「ああ、紹介しよう。彼が山田さん。ちなみにオスだよ」
「もっとかわいー名前つければいいのに…。
前の犬はアインシュタイン二世でしたよね―」

彼女ネーミングセンスはあまり良くない。オスだろうとメスだろうと関係なくつける。
彼女の名前も、「夢愛」と書いて「ゆあ」と読む。
あまり聞いたことのない名前だ。

「なんか、今日は楽しそうじゃないか。顔色いいし」細くて長い指が頬を触れる。少しひやりとする感触に、心臓が小さく跳ねた。
「うん。そーかもしれないです」
ほんの少しだけ口元が緩んだ気がした。
「聞きたい」
彼女も微笑む。
とても綺麗だと思った。
「――なんだか面白そーな人に会いました。実は同じクラスだったんですけど。髪がオレンジ色で、無口で、目つき悪くて、俺にカレーパンくれるような優しー人でした」

＊　　＊　　＊

灰かぶり（前書き）

新たな出会い。そして…。

灰かぶり

「羽柴理久っ！ちょっといい？」

帰宅部の俺が帰ろうとしている時、突然呼び止められた。
よく通る、大きくはっきりした声とは裏腹に、声の主は身長１５０？くらいしかない女子だった。
赤いフレームの眼鏡をかけている。

「なに」

早く帰って寝ることしか考えていない。
まさか喧嘩の申し出ではないだろうが…さっさと終わらせてほしい。
「あーやっぱりイメージ通り！！背丈、オレンジ頭、目つき、顔！全てを通してパーフェクト！お願いっ、演劇部に入って！！今なら即主役の座だから！」
お願いではなく命令に近い。
てか……”演劇部”？？
頭の中に、ロミオとジュリエットが繰り広げられた。
―大声で台本を読むだけじゃなく、感情移入までするあの”演劇”……？

「ありえない。断る」
反射的に口をついて出た。生まれてから今まで、ステージで何かを演じたことなんて幼稚園の時くらいなものだ。
そういうのとは無縁だった。面倒くさいし。

なのに、翌日の昼休みまたこの女子が会いに来たということは、諦めていないからだろうな。
赤眼鏡の小さいそいつは、俺と蒼井想羅が屋上で昼食をとっている最中に現れた。
錆び付いていて重い扉を勢いよく開けて。

「羽柴理久っっ！！この台本を一週間のうちにさっさと暗記して！」
よく通る、発音のいい声が響き渡る。
「……オトモダチ…？」
相変わらず抑揚のない蒼井の声。興味は特にないらしく、そう言った次の瞬間には食べかけだったサンドイッチを口に入れ、モゴモゴさせていた。
俺は蒼井に首を振ってみせ、そいつは無視して昼食を再開させた。
「ちょっと！無視しないでよ！！」
肩を怒らせ、ズカズカと接近してくる。声量がすごくて耳が痛い。
なおも答えようとしない俺を、小さな女子が見下ろす。
「はいっ」

いきなり持っていたものをバサバサッと下に落とす。驚いて見上げると、最初に胸ポケットのクラス章に目がいった。
更に見上げると、まっすぐ俺を見据える二つの瞳と目が合った。
にっ、と強気にそいつは笑った。
「私、２年１組星村風華！
演劇部唯一の２年！
改めて言うけど、あんた！演劇部に入りなさいよ！」
全く改まってないし。
こういう奴、ほんと苦手。
「昨日、入らないって言っただろ。聞いてなかった？」
軽く睨んでみたが全然動じる気配がない。あー面倒くさい。

「すごーい理久。人気者なんだねぇ……。
かーっこいー……」
無表情のまま蒼井が手を叩く。コイツ、何も聞いてない…。
「そうよ！ずっと目を付けてたの。今更譲れな……って、ん！？」
大きな目を更に見開き、蒼井をまるで品定めでもしているかのようにじっ、と見つめる。
事実、その通りで、目を輝かせながら
「あんた、もしかして蒼井想羅？ねっ、あんたも劇に出てみない？！今ならおいしい役あげるし！！」
そいつは蒼井の手を両手でしっかりと握り、にっこり笑う。蒼井の人気は、ここまできてるのか…。「ほんと――？嬉し―…」
「よっしゃっ！部員二人、Ｇｅｔッ！！」

―は？”二人”？
誰がやるって言ったよ。
蒼井はいいとして、俺は断ったはずだろ。
身勝手な奴だ。
口に出すのも面倒で、俺はそのまま無言を貫いた。
コイツがやる気でも俺がやらなければいいこと。
そうすれば、いつか諦めるしかなくなるだろうから。
「で！！台本の内容だけど、今からざっと話すからちゃんと聞いてよ？
まず人物設定ね！――…」
テキパキと話すコイツを、ぼーぜんと眺めた。
蒼井はというと、いつもと変わらない様子でいた。
星村風華はそんな俺達の前でニコニコしながら話す。
「メインはなんてったって、平凡な暮らしの少女シンデレラ！そして、羽柴理久がやる王子！あとは魔法使いね。
シンデレラは儚げで麗しく、更に、根は強くって感じで、王子はやっぱり目立ってワイドルが理想！

それでー、魔法使いはあくまでミステリアス！謎めいた美しさがほしいところね。次、話の流れね。
最初のシーンはシンデレラから。お姉様方にこき使われても、負けずに掃除をしている所からよ。
そんなある日、シンデレラの前に一人の魔法使いが現れて、こう言うの。
”ああ、可哀相なシンデレラ。望みを三つ言いなさい。私が叶えてあげましょう”」
胸の前に手を添え、役にでも成り切っているのだろう。台詞を音読する。
「……ねえ」
蒼井が突然口を開いた。首をかたりと傾けて
「シンデレラとか王子とかって……もしかしてやるのって”シンデレラ”？」
「え？言ってなかったっけ？『現代風シンデレラ』をやるのよ！」
現代風……
シンデレラ……
なんだそれ。
しかも俺が王子、とか言わなかったかコイツ。
…ぜってーやんねぇ。
「――えーと……フーカでよかったっけか？名前。
一体どこが現代風なの――？」
「風華です。このお話はね、まず根本的に原作と違うのが、王子とシンデレラの出会いの場所が、大企業の社長やその親類のパーティだってところ！
要するに！シンデレラ＝本名、鈴乃宮アリス。義父さんが〇〇企業の社長。ちなみにシンデレラは養女で、日本人と英国人のハーフよ。で、王子＝本名、王子（オウジ）　尚（ナオ）。超大企業の社長の一人息子。後を継ぐように親に言われているけど、さらさらその気はない一匹狼で不良。この二人が、身分とか立場とかの壁を越えて愛を育んでゆくの！！

超大作になるに違いないわ！」
目を輝かせて語る。
完全に自分の世界にめりこんでいた。
「わ――すごーい。
感動ものだね、ね、理久」
「べつに…」
心なしか、蒼井は楽しそうだ。微妙なウキウキ感が伝わってくる。
ほんと、微妙だが。それからしばらく、星村風華の熱弁は続き、昼休み終了の鐘が響き渡るとぴたりと話をやめ、
「じゃ、この台本あげるから授業中にでも読んどいてね。放課後また来るから！」
と早口で言い、1冊の台本を残し、去って行った。
蒼井がペラッと、若葉色の表紙をめくる。
「へぇ…これ、さっきの子が書いたんだ――…。
うわー、台詞いっぱいあるー。覚えられっかなぁ、俺…」

楽しそうなのか、面倒くさそうなのか…
相変わらずコイツはわかり分かりづらい。
栗色の髪のように、ふわふわと曖昧で掴み所がない。俺は無言で立ち上がり、ドアへと歩を進めた。
「理久」
やや大きめの声で蒼井が俺を呼ぶ。地面に座ったままの体勢で。
「忘れモノ」
そう言って若葉色の台本をヒラヒラとふる。
空虚な二つの瞳が俺を見る。軽く睨みつけ、吐き捨てるように
「俺はやるなんて言ってない。放課後はさっさと帰るから。お前が持ってれば？やるんだろ、劇」
「――そっか」
間の抜けたような返答。
なんとなく予想はしていた。蒼井は他人を強制はしない。

そして俺はドアノブに手をかけ、屋上を出た。

＊　　＊　　＊

――放課後。

さっさと鞄に教科書類を詰め込み、教室を出ようとした所、アイツ――星村風華と鉢合わせになった。
肩で大きく呼吸を繰り返し、髪が乱れているのを見ると、全力で走ってきたようだった。
「はっはっは……。
に、逃がさないんだか、ら！！ずーっとずーっと、目ぇ付けてきたはまり役なのにっ！」
目が怪しい光を放っている。がっしりと右腕を捕まれ、逃げるに逃げられない。クラスの奴らの視線が嫌なほどわかる。面倒くさ…
「あー、捕まっちゃったね、理久」
後ろから声。
蒼井だ。
「よしっ、じゃあ蒼井想羅は羽柴理久の左腕持って！！部室に行くわよ！」
言われるがままに蒼井は俺の左腕を掴む。
両腕の自由が利かなくなった。
そして、
そのまま演劇部部室に強制連行された。

「っっ部長〜〜〜〜！！
やりましたよ！”現代風シンデレラ”のはまり役見つけてきました！！」
生き生きとした声で、星村風華は黒ブチの地味な男に叫んだ。どうやら部長らしい。
「えぇっ、本当！？——って、えぇっっ！！？」
黒ブチ男が、俺の方を見るなり頓狂な声をあげる。
名札の緑ラインが目に入った。…三年生か。
「ちょ、待っ……？！星村さん？このオレンジ頭、羽柴理久！？３秒目が合ったら殺されるって噂の！」
慌てふためく部長に対して、星村風華は笑顔で
「あ、はい！王子役に適するとみて頼んだら、快くＯＫくれました！！
あと、こっちは魔法使い役にどうかと思って。
もー、すっごいやる気なんですよ—」
全くの嘘を難無く言ってのけた。部長だって半信半疑だ。
「じ、じゃあ、はじめまして。部長の黒田です。
よろしく…」
怖ず怖ずと挨拶をする部長。ペコリと頭を下げる蒼井。
「…先輩」
俺に声をかけられ、部長さんの肩がびくつく。
「なっ、なんだい？」
「俺、やるなんて一言も——」
「よーし、じゃあ早速台詞を読み合わせよう！
そこに立って！」
弱気の部長にそれを引っ張るちび女子部員。これが、この演劇部では普通のようだ。
「——二年生の羽柴くんね？ごめんなさいね、この子、強引だから。
でも、お願いね？」
突然肩を叩かれて振り返ると、一際華のある黒髪ウェーブの女子が

立っていた。口元を優しそうににっこりと綻ばせている。
――副部長か。
周りに三年生らしい人物がいないことから、そう思った。と言うか、おかしい。部員数だ。
部長、副部長、星村風華で三人。”三人”なのだ。
俺と蒼井を入れても、この部室にいるのは計五人。
他の部員の影がない。
まあ、今日がたまたま休みなのかもしれない、か。
「さっ！みんな揃ったことだし、始めましょう！！」
……”みんな”……？
「……部長…さん。他の人達は休みですか」
「え？？これで全員だよ？」「……」
五人で？
シンデレラをやるつもりなのか？
――無理じゃねーの。

「ほーらっ、羽柴理久！ボサッとしてないでこっち来てっ。
じゃ、副部長からどうぞ！！」
「おい、お前、この劇の登場人物全部で何人だ？」
「なに、今更。
あんたとシンデレラと魔法使い、それから王子の執事とシンデレラの義理の母親と姉、あと王子の父親、その他エキストラ的な人を5名だけど？」
計13人。ここにいるのは5人。半分以上足りない。
しかし星村風華は「それが何か？」とでも言いそうな顔でシラッと言ってのけた。
「……フーカー、人数足りなくない――？」
スローに蒼井が尋ねる。それに対して胸を張って答える。
「大丈夫！他の部活の人達に協力してもらえばいいことだし。
とりあえずシンデレラと王子と魔法使いが決まっていれば問題ない！

じゃあもう始めるからね！」
当てがあるのかよ、コイツ。そう思いつつ、隙をついて逃げようとしたが、星村風華がうるさいので面倒になった。
つまり、俺は台詞読みに付き合った。
最初はシンデレラ役の副部長：深瀬小夜子先輩の台詞から始まる。
「”お義母様、こちらのお掃除は終わりました。次は何をいたしましょう？”」
台詞は全て頭に入っているようで、台本を持たず身振り手振りを加えている。
「”あらそう？じゃあ次はこっちを掃除して頂戴！今日は大企業の△△社長の奥様がいらっしゃるのよ。
塵一つあれば許さないからね！！」
滑舌の良い、迫力ある声が響く。
―星村風華だ。
赤眼鏡が意地悪そうに光る。そのあまりの強さに軽く身を引いた。
そしてここで、部長：黒田さんのナレーションが入る。
「”シンデレラは英国人と日本人のハーフ。
三年前、大企業の社長によりこの家へ養女としてやってきました。
社長は美しいシンデレラを可愛がりますが、社長の妻や娘たちはシンデレラが気に入りません。
毎日毎日、意地悪ばかりしていました。そんなある夜のこと――…”」

次の、シンデレラの義父、義姉二人の台詞を、仕方がないので星村風華が読み上げ、蒼井が見事なまでの棒読みだったので注意され、いつしか場面はパーティ会場になっていた。
王子の台詞の順番が回ってきたので、読むだけ読んだ。
部長の黒田先輩が固唾を呑んでこっちを見ている。

「……”なんで俺がパーティなんかに出なきゃなんねーんだよ。
俺は親父の会社なんか継がないし。
愛想笑い振り撒くとか御免だ”」
「だめだめっっ！！
羽柴理久、声ちっさーい！もっと声張って！
そのいかにも機嫌悪そうな感じはＯＫだけど！」
この後も何度かダメ出しをくらい、星村風華の無駄に馬鹿デカイ声を聞かせられることになる。
そしてラスト。
彼女に言わせれば、”最上級なハッピーエンド”がやってきた。
正直、ほんと、
もう帰りたかった。

「”王子様。私はあなたを愛しています。本当に、心から好きです。
貴方はこんな平凡な私を、愛してくださいますか？”」
ふわり、と薔薇の花が舞うように読む深瀬先輩。
大抵の男は、こんなふうに言われたら間違いなく落ちる。
今は台詞の読み合わせをしているわけだから、
誰に向かって読んでいるかていうと、それはもちろん王子で、その王子のシンデレラへの返答を俺が読まなければいけない。
……読まなければいけない……のだろうか。
これぱかりは俺でも言うのを躊躇う。
だが、今のこの沈黙にも耐えられ難い。
短い溜息を零し、そっと口を開く。

「――”平凡なんかじゃない。俺にとって、あんたは光だ。初めて見た時からあんたは他の奴より輝いてた。愛想笑いじゃなくて、本当に笑ってた。
…世界で1番綺麗だよ。
アリス、悔しいけどあんたが俺も大好きだ”」

「「「……」」」
重苦しい沈黙が下りた。

「……びっくりした―。ココ、理久ぜーったい読まないと思ってた―。
ね、フーカ」
「……っっ」
小さな体を震わせて
「…な、んか……いい！やっぱいい！！
ここ、読んでくれるなんて思わなかった…！！
どうでもいいとか言ってたのに……嬉しい……」

ついには泣き出した。
深瀬先輩が寄り添い、よしよしと宥める。なんか大袈裟じゃ……？

「いやぁ……ごめんね羽柴君。でも、彼女がこれだけ気に入っちゃったんじゃ…ね。でも本当、さっきの場面よかったよ。
ごめん。だけど、よろしく頼むよ」
嫌みを感じさせない苦笑で、俺に右手を差し出す黒田部長。
握手を求めているらしいと気づく前に、俺は反射的に部長の手を握っていた。
9割ほど「早く帰りたい」という気持ちで。

後々その握手は
「俺、王子役頑張ります」という意味を含んでいたことを知ったのは、帰り道、

一緒に歩く蒼井に
「理久、部長さんに王子役として認められちゃったねぇ……」
と言われた時だった。

薬屋（前書き）

夢愛さんは素敵な人です。

薬屋

その日、夢をみた。

おかしな夢だった。
走っても走っても辺りは真っ暗で、先が見えない。
立ち止まると足元がぐちゃぐちゃになって沈み込んでいく。それに怯えて走るのだが、体力の限界になったのか上手く前に進めない。
その時、誰かに腕を引っ張られた。
どうにかして顔を見ようとする。しかし、そいつ自身が全身真っ黒で全く見えない。
ただぐいぐいと前へ引っ張るのだ。
それで、やっと周囲が薄紫色程度に明るくなると、その人物の正体がわかった。
蒼白とも言えるだろう、すっとした肌に、長めの前髪。虚ろな瞳。
異常なまでに伸ばされた黒髪を、無造作に大きな飾りのついた髪留めで括っている女。
駅前の小さな店の前で椅子に座っていたあの女だった。

――夢はここで終わり、俺は静かに目を覚ました。
多少、なんであの女が夢に出てきたのかという点で驚きはしたものの、理由はわかるはずもないためその疑問は放棄した。
そして、行きたくもない高校へ行くために、準備を始めた。

＊　　＊　　＊

登校中、夢のこともあってあの黒い女の店、”Ａｍｅｎ”を無視していくことはできなかった。
いつもよりもマジマジと、しかも立ち止まって店を眺めた。
くすんだ赤い屋根が唯一の目印だ。華やかさも目立つ要素も、その小さな店にはなく、そればかりか看板には店名が控え目に書かれているのと、消えそうな字体で「Ｙｏｕ　ｃａｎ　ｇｅｔ　ｄｅｓｉｒｅ　ｈｅｒｅ」――貴方は此処で希望を手に入れることができる――と、あるだけで、具体的に何を売っているのかわからない。
木の扉には”ｃｌｏｓｅ”とある。（当たり前ではあるが、今は早朝なので店はほとんどやっていない。）
少し背伸びして店の丸窓から中を覗く。
しかしあまりに薄暗くてよく見えない。

「あっれ――？そのオレンジ頭……理久？」
全く緊張感のない、気の抜けるような声に後ろを振り返った。

「……蒼井、か」
正直蒼井でほっとした。
すると蒼井が店の扉の前に立ち、ドアノブをガチャリと回した。
チリン、チリンと可愛らしい鈴の音が二回鳴った。
唖然として、動きを止めた俺に、蒼井は小首を傾げ
「どーしたの、そんなびっくりして。
中、入れるよ？」
手をひらひらさせ、店の中へ招き入れられた。
改めて薄暗いと感じた。

店には木製の大小様々な棚があり、その上には書物、花瓶、小物、蝋燭、古めかしい人形――特に多くあったのが、大きさ・色・形がバラバラの、蓋付きのガラスビンで、中には飴玉みたいな物が入っている。…なんだこれ？

「夢愛さーん。
おはよーございまーす」

迫力のない声が、空気中に溶けてゆく。
その声に答える者はいない。

”ゆあ”。
どこかで聞いたことがある気がした。

「蒼井。お前、ここ来たことあんのか？」
細い体を翻し真っ直ぐこっちを見据えると、なんてことないように答えた。
「ん？毎日、だよ。毎日来てる。いーところだよ、ここは」
ほんの少し嬉しそうに笑ったように見えた…蒼井の割には。

「――――想羅？」

店の奥から静かで高めの、不思議な声がした。
姿が見える前に、それはあの真っ黒な女だとわかった。

「朝来るなんて珍しいな。何か用？」

面倒くさそうに聞こえる女の言葉は蒼井に対して、しかし女の視線は明らかに”よそ者”の俺に注がれていた。「お前は誰だ？」とも「あの時の奴か」とも取れる、何を考えているのかわからない瞳。長すぎる黒髪に、黒のロングスカート。所々に白いレースがついている。

「……おはようございます」
礼儀としてとりあえず挨拶をしてみる。
女はこっくりと頷いた。そして
「Ａｍｅｎ―アーメン―へようこそ。店長の夢愛、です。
えっと…ハシバリク……くん？」
無駄な感情、愛想とか興味とかが感じられない。
今までに例がないくらいの無愛想だった。
蒼井はふわふわしてて掴み所がない変な奴だが、人間が好きなのだと伝わってくる。だけど彼女は違った。
俺の名前は蒼井にでも聞かせられたのだろう。
「はい」　と答えると、蒼井が口を開く。
「理久、ここは薬屋。
全然お客来ないんだけどねぇ…。夢愛さんは俺らより２つ年上でー、変わり者だけど悪い人じゃないよ」
「……薬？」
店内を見回すが、それらしい物は一つもない。
「これ」
ひょいっと、蒼井が一つの小瓶を手に取り、俺に手渡した。瓶の冷たさが手の平をつたう。
中を覗くと青紫色の玉が五つほど入っていて、キラキラと輝いていた。
「これは？」
「え？だから、薬だよ？」
「……こんな薬見たことない。何の薬…？」

「うーんと……
夢愛さん、これ何の薬？」
蒼井が尋ねると、すぅっと目を細め、ゆっくりゆっくり近づいてくる。
「キズ薬Ｎｏ．２１。
効果は感傷を癒す。
副作用はなし。強度は中の下」
「だってさ、理久」
”感傷を癒すキズ薬”？
どういうことだ。よくわからない。
わかるとしたら、この薬屋は全く普通じゃないということだ。
ふと”夢愛さん”に視線を向けると、多分、目が合った。
多分、というのは、この人が常にどこを見ているのかわかりにくいから。というか、この人は現実なんかみちゃあいない気もする。現実の奥の、更に奥を見通せそうなくらいの。
不思議だ。

「君には……
これかな、」
ゆっくりと”夢愛さん”は歩きだし、カウンターから5歩くらいの所の棚から、サイコロ型の瓶を取り上げるとその折れそうなほどに白く、華奢な指で蓋を開ける。やや低めの音がした。
「Ｎｏ．６。《無題》」
カラコロと乾いた音をたて、彼女の手の平に赤い玉が落ちた。
いや、赤と言うより夕焼け色と言った方が近いかもしれない。思わず目を見張る。所々ひびが入ったような感じで、しかしそれがまた美しい輝きを生み出しており、傾け方を変えると
オレンジがかって見えたり、黄色がかって見えたり、時には濃いワイン色にだって見える。
魅力的で、少し怪しげな玉だった。

「……物足りないのでしょう？この退屈だらけの世の中が。
騒音が鳴り響く日々が。
名も知らぬ何かを探し求めてる、ずっと。
ねぇ、
君の探している物がここにはあるかも……って言ったら、　どうする？」

時が
止まった。

そんな気がした。
何秒、または何分かが経過した後ぼそりと「これ、いる？」と問われ、一瞬、ほんの一瞬だけ躊躇ったが
「いらない」
と一言断った。何故か声が震え、気持ち悪くなる。
――この女、苦手だ。

全てを見透かされているような目が、とてつもなく恐ろしい。
常人じゃない。
嫌だ。気持ち悪い。

「……失礼します」
一礼し、足早に店を出ると、いつの間にか俺は逃げるように走り出していた。

「行っちゃった……。
また来てね、って言えなかった…」
「そう思ってるなら、にっこり笑えばいいのに――…。俺が伝えときますよ」
「――ね、想羅」
「はい？」
彼女の表現が微妙に寂しげになる。
「私は、やっぱり何を考えているのかわからなくて、恐ろしくて、……気持ち悪いらしい。
彼はもう、来ないかもしれない」
―”大丈夫ですよ”。
その言葉はいらなかった。言葉に出さずとも、彼女はわかっている。
「…ありがとう」
ほら、伝わった。
普通の人よりも、他人の感情に敏感なあなただから。

シンデレラと王子様（前書き）

結構長めになりました…。二人が初めてぶつかり合います。楽しんでいただけたら嬉しいです（＊＾＾＊）

シンデレラと王子様

朝から疲労に襲われながらも、ようやく教室の前までたどり着くことができた。
Ａｍｅｎ―アーメン―とあの女が頭から消えない。
走っても走っても影のように付き纏ってくる。
これじゃまるで夢の続きだ。
教室の扉を開ける。
いつもより騒がしかった。

「うそっっ？！！それって本人がやるって言ったの！？無理矢理じゃなくて？」
「うーん、わかんないけど、星村が”羽柴理久はすごーくやる気なんです！！”とか何とかって、先生に話してるの聞いたって鈴木が……」
「えー！！意外すぎでしょ！そんな”王子”とかやらない人だと思ってた！！でも楽しみ、かも…」
「つか、劇なんてやりそうもないよな！
蒼井はなんか、魔法使い役やるってよ。
あの二人、いつの間に仲良くなったんだろうな？
不思議な組み合わせだよなぁー」
「羽柴がカレーパンで餌付けしたらしい」「えっ！蒼井がメロンパンで、じゃなかったっけ？」

…何を朝から話してるのかと思えば……。うるさいな…。
黙ってスタスタと自分の席へ行くと、やっと俺の存在に気づいたようで、話し声が小さくなる。
昨日、放課後に星村風華が来た時から、こういうことになるような

気はしないでもなかった。

”クラスの不良がチビ女子に連れて行かれた”なんて、ある意味面白い図だ。詮索しないわけがない。

面倒なことにならなければいいと、天に祈るのみだ。

数分後、蒼井が教室に入ってくると、男女問わずほぼ全員が彼に詰め寄り、質問攻めにした。

「劇出るんだって？羽柴と！」「王子やるってほんとか！？」「やる気満々なの？」「蒼井は魔法使いってマジかよ！！」「餌付けしたのはどっち！？？」

訳のわからない質問も混ざり合い、仕舞いには何を言っているのかわからなくなった。

蒼井は質問5問につき1回くらいの割合でなんとか答えていたが、面倒くさくなったのだろう。

へらっと笑って

「お腹空いた―……。

何か恵んでちょーだい」

と言い、質問を強制中断させ、女子から飴やらクッキーやらを貰っていた。

上手く撒いたものだ。

すると

口に飴玉を入れた蒼井がフラフラとやって来た。

甘ったるい苺の匂いがした。

「夢愛さんが、また来てねって言ってたよ」

「…ふーん……」

「もうあそこには…

夢愛さんの所には行きたくない……？」

声色が少し沈んだのに驚いて、蒼井の目を凝視した。ちゃんと目が

合う。
「なんで、」
ん――、と蒼井は栗色の髪をワシャワシャと掻くと
「なんてゆーかなーー…。
とりあえず、あの人は変わり者だけど悪い人じゃないってこと。
それだけは理久にわかっててほしいなって。
そーれーにー」
軽く微笑む。
飴玉がパキッと、口の中で割れる音がした。
「お客さん来なくて、すーっごい暇なんだって。
たから、また行ってあげてよ―」
その言葉と甘い匂いを残し、フラフラとどこかへ行った。ガリガリ飴玉を噛みながら。

蒼井の細長い背中をしばらく見つめ、そして教室の窓へと視線を移した。
雲が一つもない、とても綺麗な空色が眩しくて、目を閉じた。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「――――となる。
じゃ、羽柴。この問題解いてみろ」
時はいつしか４時間目の数学。
担当の町田が応用問題の中でも、一際ややこしいのを俺に解くよう命令する。
いつものことなので気にはしない。
良い意味で俺を試してくれているのだと、知っている。
「はい」
返事をし、前に出る。
チョークを持って淡々と式と書き連ねていく。

自信があるわけでも、ないわけでもなかったが、とりあえず町田が頷いて「よし」と言ったのでよかったと思う。
席に戻る際、蒼井が机に俯せになって寝ているのが見えた。
町田もそれに気づき、大股で蒼井の所まで歩いていくと、教科書で軽くパシンと頭を叩いた。

「う〝――――……？」
ゆっくりと頭を上げる蒼井だが、目は眠そうに半開きで、また眠ってしまいそうだった。
周りのやつらがクスクス笑う。見下すわけじゃない。嫌な笑いじゃない。
皆が”認めた”蒼井想羅だからこその、穏やかな笑いだ。町田だってそれを面白がっている。俺には無くて、蒼井にはあるものの一つ。
蒼井想羅という人間は、誰からも好かれるということだ。
だから
だからこそ、俺みたいな奴に関わる意味がわからない。
あの日、屋上で倒れたあいつを運んだだけだ。
それだけだったのに何故。消えない疑問が頭を支配し、退屈な授業など全然聞いていなかった。
そして、昼休みに入る。

教科書やらノートやらを片し、コンビニで買ったパンを片手に教室を出ようとすると蒼井が呼び止めた。
「理ー久ーー。一緒に屋上行こー」
やや周囲から変な目で見られたが、こいつは全く気にしない。もしくは気づいていない。
「いやだ」　とは言わなかった。蒼井に言いたいことがあったからだ。

＊　　＊　　＊

屋上に着くと、思わず空の青さに目を細める。
風が少し強めで、オレンジと栗色の髪がどちらも靡いた。
このまま何処か遠くへ飛ばしてくれていいのにと、現実的に有り得ないことを考えてしまった。
早速口を開こうとすると、蒼井は直進し、転落防止のために張られている緑色のフェンスを軽々しく乗り越え、淵に立った。
風が、吹く。
このままじゃ、蒼井が空に溶けて消えてしまうんじゃないか。
妙な感覚が心臓をざわめかせる。

「――――…つまんなかったんだ。ただ生きてるだけなんて」

なに、を言ってんだコイツ。思考回路が上手く回らない。目の前にいるのは蒼井なのか。それすらも怪しくなってきた。
「…ってね」
くすりと笑うと、俺にこっちへ来るよう言った。
”蒼井想羅”としての形をちゃんと取り戻していたことに胸を撫で下ろす。
変な言い方だけど。

「中学生のとき、屋上で今と同じことして夢愛さんにぶん殴られた…」
「……、なんでだよ」
素直に、何も考えずに出てきた言葉に驚いた。
「俺にだってさ、いろーんなことがあったんだよ。
それで、ちょっとばかしグレちゃって。
あ、別に怒鳴り回すとか、喧嘩しまくるんではなくてー、一人で悶々と落ち込んでた」

蒼井がグレるといった感じを想像してみたが、全然想像できなかったのでやめた。そういえば、こうやって蒼井が自分のことを喋るなんて初めてだな、と思ったりもした。
多少の息苦しさを感じつつも、蒼井の横に立ち、ただ黙って話を聞き続けたのはそのせいかもしれない。

「…なーんでだかは自分でもわかんないけどねー、死んでもいいかなーなんて思っちゃったんだよね。
”屋上から飛び下り、中3男子”とか、なかなか衝撃的じゃない？んで、ある日の放課後、一人で屋上行ってフェンス越えて、さあ行くぞって時に全身黒服の女の子に腕捕まれた」
”夢愛さん”のことを言っていることは、すぐにわかった。
「もんのすごーい怒ってて……”この大馬鹿もんが”とか怒鳴られて。
あんまり必死で言うもんだから飛び下りるのやめて戻ると、今度はグーで思いっきし殴るし。
”なんだよ”って睨んだら、胸倉捕まれて
”命なんてものは呆気なく消える。消えるけど、自分から消そうとする奴は、私が許さない”って。
―いっぱい叫んでた。
俺、その時初めて夢愛さんに会ったんだけど、こんな容赦なく言いたいこと言ってくれる人も初めてで、
気づけばほとんど毎日あの店行ってる。　……で、今じゃ俺はこんなに前向きに笑ってられる。すごくない？」
へらっと、こっちを向いて笑う。一度死のうとした蒼井想羅はどこにもいなかった。ひょいっとフェンスを軽く飛び越え、こっちへ戻る。
俺が何か言うのを待つように、隣に立つ。
我慢ならなかった。
なんで―――…

「――なんで俺なんだ。
ここでこの話聞いたり、昼飯食べたりするのが、なんで俺なんだよ。
お前は前向きに笑えるようになって、誰からも愛されるような人間なのに、わざわざ誰からも好かれてない俺に関わる。
意味がわからない。
お前にプラスになることなんか一個もない。マイナスでしか有り得ない。
俺、いきなりお前のこと殴ったりするかもよ？
それでもいいわけ？
哀れみとか気遣いだったら、本当にもういいから。
もう関わらない方がいいから。
…言いたかったのはこれだけ。じゃ。」

口早に言って立ち去るつもりが、そうはいかなかった。蒼井に肩を捕まれた。
顔を見ると、少し怒っているような気がした。
「なに言ってんの？
俺、カワイソーだとか思ってこんな風に話したりしないし、そんな面倒なことやりたくない。
話したいと思ったから話した。
関わりたいと思ったから関わった。
それだけだよ。
一体なにをそんなに構えてんの、理久」

”何ヲソンナニカマエテンノ、リク”
聞かれているのに答えられなかった。
”構えてる”……？
わからない。
”何を”？

わからない。

「わからない」
お前も、自分のことも、何もかもわからないことばっかりだ。
わからないことは怖い。
怖いのはわからないからだ。
どす黒い感情が立ち込める。

「―わかんねーよ、そんなの」
力無い言葉が洩れた。
ヘドロみたいにドロドロと、嫌な後味が残る。
肩から蒼井の手の重さが消え、いつもの、あの一定のトーンで
「……もし、俺がむかつくんなら殴っていーよ。
でもそんなんじゃなくて、色んなこと吐き出したくて、俺じゃヤな時はあの人のトコ行ったらいーと思う」
突き放した言い方でも、同情の言い方でもない。
そう言って、へらっと寂しそうに笑った。
返答はせず、俺は黙って屋上を出た。
言いたいことは言った。
でもスッキリなんかしない。かえって複雑な感情に巻かれた。蒼井のせいだと思った。
他人と深く関わりたくないのに、いちいち怒ったり寂しそうにしたり笑ったりするから。
しかも大きな問いを俺に残して。

”何をそんなに構えてんの”……。
理由はわからない。でもただひたすら恐ろしいのだ。
何がと聞かれても、明確な答えは見つからないだろう。けど、俺は

恐ろしい。
だから逃げた。
わからないモノを尋ねてきた蒼井から。
考えを巡らせながら白い階段を下りていると、向かい側から見覚えのある坊主頭がやって来た。
…多分、教室で机を蹴り飛ばした奴だ。
あの時は他に何人かいたが、今は一人のようだった。蒼井が
「一人じゃ何もできないんだろ」的なことを言ったのと関係あるのだろうか。

「おい、羽柴。ちょっと顔貸せ」
大きく太い声が飛んできた。
反抗心剥き出しの瞳を無関心に眺める。
「いいよ」

……

人通りのない体育館裏。
坊主頭が選んだ場所はそこだった。
向き合うやいなや、そいつは俺の胸倉を掴み、奇妙な笑いを浮かべながら言った。
「この間、殴りたきゃ殴れって言ったよな。
蒼井はいねぇし、逃げるなら今のうちだけど、どうする？」
ああ。そういうこと。
この間殴り損ねた分を殴りたいと？
他人事のように思う。
「面倒くさいから、こうゆうの、これで最後にしてほしいんだけど」
「ああ、そーか……よっ！！」
腕を大きく振りかぶって、右頬を殴られる。

痛みより熱さが最初にきて、口の中に血の味が広がった。あまりにも力が強く、俺は後ろの体育館の壁に思いっきり背中を打ち付けた。
「――ッいって…」
間を空けず、次は腹に撃ち込んでくる。
膝を着いて咳込んでいると、再度胸倉を掴まれ左頬を殴られた。
左の次はまた右、そのまた次は左。
なんども、なんども。

「―なんでやり返してこねぇんだよ……ッ！！」
「……っっ。なに、言ってんだよ。お前から殴ってきて、”なんでやり返してこないんだ”？
はっ、馬鹿じゃねーの。
俺はこんなことする気ない。面倒くせーし。
さっさと終わらせてくんない？」
相手の地雷を踏んだらしい。顔を真っ赤にして再び殴りかかってくる。
叫びながら
「そういうお前の態度が気にいらねぇんだ。
やる気もねーくせに勉強も運動も完璧にやって、
しまいには親が弁護士だからってお高く止まりやがって！！死ぬ気で努力してる奴がどんだけ悔しい思いしてんのか、考えたことあるか！？俺らにとっちゃ、お前は邪魔なんだよ。
飄々とやってきて、意図もたやすく1番取ってく。
ふざけるなよ！
なんか言ってみろ！！」
何度も何度も殴られ、視界はもう、歪んでよく見えなかった。
痛みも麻痺して感じない。けどコイツが何を言っているのかは理解できた。
”邪魔なんだよ”
そうだな。

俺は言い返す立場にない。その気力も、ない。
よくはわからないけれど、多分俺が全て悪い。
やられるままにやられた方がむしろ楽だし。

「……げほっ……」
血にむせる。
相手の息も結構上がってきてると思う。
興奮状態が冷めつつある。ふと、幼い頃の記憶が途切れ途切れ、脳の片隅に映し出される。
『”相手から殴ってきた”それだけの理由でやり返すんじゃない！！強くなれ、理久。どんなことがあっても、他人を傷つけることは許されないんだ。どんなことがあっても、絶対に』
幼稚園に通っていた頃。
初めて友達と殴り合いの喧嘩をした。今となっては、叩き合いと言った方がいいかもしれない。
相手から叩いてきたのに対抗して叩き合いになった。そして、その頃から弁護士として仕事をしていた父親に、ひどく怒られたのだ。
…てか、本当なんでイマサラ。

「くっ……そ…！！なんなんだよ…お前っ！！！！」
俺を気持ち悪そうに見てくる視線。

―では、一体どんな理由があれば、人は人を傷つけていいのだろう。
弁護士として高い位置にいるという父親は、はたしてその問いに答えられるのだろうか。

「……ッく、はっ」
どうにもこうにも、さすがに怠くなってきた。
膝を地面に着いた体制から立ち上がると、頭に鋭い痛みが走った。

…気持ち悪……。
ぐるぐるする頭はとてつもなく重かったが、耐えられないほどじゃない。
まだ平気の範疇だ。
「―いいよなぁ、親が有名だと結構顔利くだろ。
先生たちの視線もやっぱ俺らとちげーし。
幸せ者だよな。
怖いもんなしで。
そーいえばお前、中学卒業危なかったらしいじゃん。ははっ、無事卒業できたのも、親の権力か？」
幸せ者……？
どうしても聞き流せなかった。気がついた時には坊主頭の襟足につかみ掛かっていた。そいつの目が、大きく見開かれる。
「……親が弁護士だから幸せ者？お前、今そう言ったか？
馬鹿じゃねーの。
俺がそんな幸せそうに見えんのか？悪いけど、お前が思ってるほど幸せでもない。いつだって親と比べられるし、あんたらみたいなのに絡まれる。最悪だ。
だから他人に幸せ者だとか決め付けられたくない。
何も知らないくせに、勝手に羨ましがって逆ギレすんなっつーの。
俺が嫌いなら、もう俺に面みせんな。
それができないんなら、
俺を殺してよ」
相手がぎょっとしたのが、雰囲気でわかった。ほんの冗談のつもりだったのに。大袈裟な。
何秒間か睨みつけ、そいつを捨てるように手を離す。一発殴ってやりたくもなったが、面倒くさくてやめた。不思議なことに、そいつは何の反撃も反論もしてこなかった。
有り難いことではあるのだが。

どこか傷ついたような顔をした坊主頭を置いて、校舎側へ向かう。
足元の草を気にすることなく歩いていると、木陰に人の姿があった。
小柄で赤眼鏡。
肩に少しかかる髪が、何故か寂しそうに見えた。
俺に気づくと驚いた顔でこっちを見てきたが、すぐにそれは直り、
いつもの顔に戻る。真っすぐ俺を見たまま、近づいてくる。
意外だ。
さっき殴られて、相当ヒドイ顔になっているはずなのに目を背けず
に近づいてくるなんて。
しかも女子だ。

「うはー！すごいねこりゃ。顔、めちゃくちゃ腫れてるよ。真っ赤！
大丈夫、じゃないよね、これは」
星村風華はポケットからハンカチを出すと、素早く俺の頬に当てた。
目をしかめて避けようとしたら怒鳴られた。
「よけないで！王子に傷がついたら本当ーに困るんだから！！どう
せあんた、自分で処置しないだろうし」
「じゃあ、保健室行くからいい」
「……嘘でしょ」
まったくもってその通りだった。
保健室にはあの女保健医がいる。
マスカラバチバチの派手な先生が。
気軽に話し掛けてくるからかえって苦手だ。
でもそれは、星村風華でも同じだった。

「……なんでいんの」
「羽柴理久に用があったから。廊下で見かけたからついて来たの。
そしたら喧嘩始まったから、ここで待ってたんだけど」
悪びれる様子もなく真っすぐこっちを見て言い切った。怒る気にも
ならない。溜息混じりで「用件は？」と聞くと、眼鏡の奥の瞳が確

かに光った。
に、と歯を見せて笑いながら、胸を張って答える。
「シンデレラの配役、昨日、あんたらが帰った後に正式に決まったってことと、劇の日程がについて知らせたかったの。
女子バレー部とサッカー部の三年生が、高校最後の思い出にしたいって集まってくれた。
で！！日程は約一ヶ月後にある、ここ、若草第一高等学校の伝統行事！！”青春祭り”て、一日目の最後から三つ目のプログラムで組むことになったから！
実行委員にはなってもいいけど、ちゃんと予定空けといてよね！！」
手際よく近くの水道でハンカチを濡らし、傷に押し当てながら一度も噛むことなく言い切る。そして、どこからか大きな絆創膏を取り出し、頬にぺたんと貼られた。
「…俺、王子役どころか、劇に出るとも言ってない。勝手に決めんなよ。すげー迷惑だ。
ってかあんたさ、俺が劇なんか出たらどうなると思ってんの？
盛り上がるとか思ってるわけ？
―んなはずないだろ。
蒼井はともかく、俺は違う。劇に出る気ないから。
やる気も何もないから。
劇自体、どうなってもいいし」
すぐに反論してくると思った。今までそうだったように。
でも、今日は違った。
本当に悲しいとでも言うように顔を歪ませ下を向く。泣くのだろうか。
頼むからやめるなと、泣いて頼んでくるのだろうか。―しかし、そうではなかった。深く決心した目つきで、ぐっと顔を上げ、強い感情一つで立ち向かってきた。怒りではない。
強い感情一つで。
「別に、盛り上がるなんて思っちゃいないわよ。

校内一有名な不良が出る劇でしょ？下手したら誰も見に来てくれないし、たとえ来てくれたとしても静まり返るかもね。
でもね、そんなことはどうでもいいの、本当のところは」
意味深なことを言う星村風華に目をしかめると、彼女は不敵に笑った。
「だって私がさせないからね。絶対あんたを歓喜と感動の渦へ巻き込んでやる。で・も！
羽柴理久、あんたが劇に出なきゃ意味ないの。私はどんな手使っても、あんたをステージに上げるから！
恥かきたくないなら、台詞覚えてよね！」

そう言ってさっさと走って行く。ああ、そういやもう午後の授業が始まる時間だなと思った。
それにしても、どういう意味なのか。
――”どうでもいいのよ、本当のところは”
あいつが作った台本の劇だろ？盛り上がることが趣旨なのは当然のことなのに、あいつはどうでもいいと笑いながら言った。
――”羽柴理久が出なきゃ意味がないの”
俺が出なきゃいけない理由…？そんなのない。ないはずだ。
ただ、油断ならないのは自信たっぷりに俺をステージに上げると言ったことだ。本当に何をするかわからない。気をつけなければ、とこの時思った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
放課後。
今日は水曜日だ。星村風華が月・水・金は特訓だと言っていたが、全く行く気はなかった。
しかし今日も、そいつはきた。

わざわざ二年一組の教室から三組の教室へ走って。
教室中がざわめく。
「おいっ、星村！お前…その、マジなのかよ？あの、劇やるって」
男子生徒が一人、星村風華に聞く。
「えぇ。何をそんなに驚いてるの？シンデレラよ？
現代風シンデレラよ？
絶対素敵なんだから、楽しみにしてて！！」
にっこりと満面の笑みを浮かべ、無駄な宣伝までする彼女は、昼休みのことなど微塵も感じさせない。
逃げようとすれば、女子の割には力があるようで、腕を掴まれて簡単には振りほどけない。本気で振り払うこともできないことはないが、女子相手にできるはずもなく、やはり今日も演劇部へ強制連行された。
蒼井はというと、星村風華に加担することもなく、虚ろな目で俺たちの後ろを歩いた。

「しっつれいしまーす！」
馬鹿でかい声を出しながら、勢いよくドアを開ける。すでに部室には部長の黒田先輩と副部長でシンデレラ役の深瀬先輩、それと何人かの三年生がいた。
見たことない人ばかりだ。
深瀬先輩がふわりと髪を揺らしながら椅子から立ち上がり、華やかに微笑んだ。
「ふふ、今日も元気ね風華ちゃん。
いらっしゃい、羽柴くん、蒼井くん」
「おお！！こいつらか、王子と魔法使いは。
いーじゃねーか！目立つし！それにしても、あの羽柴理久か！もっと感じ悪いのかと思ってたぜ。
いやー、すげえオレンジなのな！」

一段とキャラの濃い先輩が俺を見るなり言い、髪をワシャワシャと触ってくる。眉が濃く、目力がある。
輪郭もゴツい。後に、この人は王子の父親役だと知る。ぴったりだ。
（存在感が）
「……こんにちは…」
「あっはっは！礼儀正しいなぁ、おい！」
なんで笑うんだ…。

「どーもー……」
横から蒼井が気のない挨拶をする。途端、黄色い声が聞こえはじめた。
「あたし知ってるよー、二年三組の蒼井想羅くんだよね？噂通り、キレーな顔してるねー」
「私も知ってる！背高ーい！！何センチあるの？」
女受けする顔だとは思ってたけど、先輩にも知られてるのは知らなかった。

一気に場が盛り上がり、徐々に落ち着くのを見計らって、黒田部長が口を開いた。
役設定の確認をし、役一ヶ月後に控えた青春祭りのプログラムについて話す。
ほとんど星村から聞いたことだったのであまりよくは聞かなかったが。
それらを一通り話し終えると、黒田部長は眼鏡をくいっと上げ、
「――それで、肝心なのが衣装なわけだけど、
事実問題、この部の部費で全て揃えるのは無理だ。…というより、小道具作るだけで精一杯なんだよ。
みんな知っての通り、演劇部は三人しかいなくて廃部寸前だからね…。
それで、誰か衣装になりそうなドレスとかスーツとか持ってる人い

ないかな？」
「うーん……。スーツなら兄貴のがあるけど、ドレスはさすがになぁ…」
「あたしもー」
まあ、そうだろう。
ドレスなんか持ってる家庭、ないだろう、普通。
「……あーのー、俺ん家に何着かありまーす…。使えるんならどーぞ。
多分、大丈夫と思いまーす…」
緊張感のないスローな声。片手を挙げてそう言ったのは、蒼井だった。
注目が蒼井一人に集まる。
「あんたそれ、本当…？」
疑い深げな星村に、蒼井は小首を傾げ「うん」と一言頷いた。
「母親がそっち関係の仕事してるから、やたらと持って帰ってくるんだよねー。そろそろ捨てたいとか言ってたしー…ダメとは言わないと思う」
辺りに歓声が上がった。
「よし、これで今のところ問題は全て解決した。
あとは僕らの努力しだいだ」
心から嬉しそうに黒田部長が言う。
黒田部長だけではない。
副部長も、星村風華も、周りの三年生も皆、すごく楽しそうに笑っていた。
俺は、自分だけがその輪に入っていけないことを、何となく感じていた。蒼井も先輩たちに囲まれているが、何も変わらない。変に力を入れないし、空気を和ませる。

その日は、劇に使う花や飾りなどの小道具を作る分担を決めただけだった。

窓の外がうっすらと青紫色になった時、俺達は解散した。

昼休みのことがあってか、蒼井とは一度も言葉を交わさなかった。

シンデレラと王子様（後書き）

次回の話は、実はちょっと気に入ってたりします。自己満足ですが（＾＾；）

Ｒａｉｎ（前書き）

短いです。
ちょっとだけ、理久が前を向き始める……かも。

Rain

翌朝、いつもより早く家を出た。雨が強かったため、ビニール傘を差していても肩が濡れた。
うんざりしながら通学路を歩いていると、「Ａｍｅｎ」の前に、空色の傘を差す黒いシルエット。
言うまでもなく、”夢愛”さんだった。
身動き一つせず、真っすぐ前を見据えて立っている。通りづらそうに会社員や学生が前を通りすぎても、何も感じないようだった。
俺も当然通りづらかったが、通らないわけにはいかない。
歩みを止めず、通りすぎようとした。しかし。

「――あ、……待って！」
静かに高く澄んだ声。
にこりともしないで、こっちを見る。

「想羅が昨日、とても変だった。理由は君。
――ちがう？」
「……」
「想羅もボロボロだったけど、君のほうがずっとボロボロだね。
見た目が、じゃなくて」
”ここ”
細くて白い人差し指で、自分の胸を指し示す。
そして、雨の音で消されてしまうほど小さな声で
「こころ」、と言った。ふいに吹いた風で、一層雨が強く当たる。
顔に雨粒がかかっても、夢愛さんは拭わず、再び口を静かに開いた。
「君はなにから一生懸命自分を守ってるの……？
君が恐ろしいと感じる物から？

でも、きっと君はその恐ろしいものが”わからないもの”だと思っているのでしょう？とすると、その”わからないもの”って何なのかな。決して自分の手で見つけだすことができないもの？他人が教えて、納得できるもの？

――”ちがう”んだろうね。だけどね、君がどんなに遠くへ逃げても、たどり着いた地に答なんか見つからないよ。

結局、君の心以外のどこかに、答はないってこと。

旅人が自分探しの旅に出るのも、それを知るための一つのきっかけに過ぎない…と、私は思ってる」

長い睫毛に雨粒が乗り、彼女が瞬きをすると、透明なガラス玉になって頬を伝う。綺麗だった。

「偉そうなこと、言うね。

もっと傷ついたり、傷つけたりしなきゃ手に入れたい物は手に入らないよ理久くん。

想羅が君に何を言ったのか、君が想羅に何を言ったのかは、私はわからないけど。

逃げるのは欲しいものから遠ざかることだからよくないと思う。

君が本当に答を知りたいのなら、

その大きさの分だけ傷つく覚悟を決めなくちゃいけないからね……」

「……覚悟、を……」

決めなくちゃいけない。

今のままが嫌なら、抜け出すこと。

逃げるんじゃなく、そのために傷つく覚悟を。

そのために傷つける覚悟を。

合わせられなかった目を彼女に向けた。

ふ、と小さく、本当に小さく口元が綻んでいた。

初めて見た、人間らしい表情だ。

「――いってらっしゃい。
またね、理久くん」
ぎこちなく右手を揺らす。「またね」がこれほど心地よく響いたのは初めてだった。

浅く礼をし、
雨が降る道を歩きだした。

Ｒａｉｎ（後書き）

またしばらく時間がかかります（ー＿ー；）
お時間がありましたら、他の作品もご覧ください（＾＾）

日蔭の少年（前書き）

仲直り……かな？

日蔭の少年

「あ」
教室に入るとそこにはもう蒼井がいて、他には誰もいなかった。
いつもは遅刻ギリギリで教室に入ってくるというのに珍しい。
苦々しい表情で蒼井が近づいてくる。
何か決意のようなものを秘めたような、妙な緊張感があった。

「――俺さー、なんてゆーか……
昨日理久にもう関わるなって言われて、これでもショックだったんだよね。
俺は、理久といるの楽しいし、仲良くしたいなってのがあるのに、理久は違うんだーみたいな……。
そーれーにー、俺、感じ悪いこと言っちゃったかなーと思って。
だから……
スミマセンでした」
細い体を折って、深々と頭を下げる。
変な図になってるだろうな…。
「あとさー、一個だけ答えてほしいんだけど。
理久は俺のこと嫌いだったり、する？」
微かに不安げな顔。
…に見えるだけかもしれない。
人間なんて、表情に全て思ってることが出るわけじゃない。腹の中で何を考えているかもわからない。
優しい人間って何だろうか。嫌な人間って何だろうか。人間ってやっぱり謎だらけだ。確かなこともない。
目の前に立つ、この蒼井想羅なんか特に普通じゃない。

一層謎が多い。信用できないかもしれない。
もしこっちが信じても、蒼井はそれを呆気なく裏切るかもしれない。
でも、

「……お前は変人だ。
何考えてるんだか全然わからないし、１００％信用してるわけでもない。つか俺自身、どう思ってるかわかんねんだよ。
ただ、べつに嫌いじゃない……と思う。
昨日、悪かった。
忘れて。」
蒼井はしばらくぽけっと、何を言われたのかわからない様子だったが、突然吹き出した。
「――っははは！あーよかった。
あ、でも変人はヒドイ。
じゃあ今後とも、どーぞよろしくお願いします」
いつものヘラヘラした笑い方じゃない。
腹を抱えて笑う蒼井を、不思議そうに見ていた。
（なんで、笑ってんだ。
やっぱりコイツ変人だ。）

――――――ガラッ。

教室のドアが開く。
はっとして、俺と蒼井に気づいたらしい。
動きがぎこちなくなったのは、恐らく俺のせいだろう。
「あ、う、よっ！
お二人さん！！邪魔だった！？」
俺が言えた立場ではないかもしれないが、チャラチャラした感じの奴が引き攣った笑顔を浮かべて言った。蒼井が顔を上げる。

「おー、おはよー長野」
「いやいやいや！！長崎だから！！！
”長”しか合ってねぇから！！いい加減覚えろよな！」

コイツ…
横目で軽蔑的な視線を蒼井に送る。
本人は気づかないようだった。

「蒼井、お前大丈夫なのか？そんなんで劇のセリフ覚えられんのかよ？」
「へーき。ノープロブレム。ダメな時はカンペ用意してくれるって言ってた」
「ふーん？……」
チャラ男の視線が俺に向けられる。なんだと思って目を合わせると、びくっと肩が跳ね上がり、一歩後ずさりした。
「わっ、スンマセン！！
命だけは勘弁……」
「……は？」
そういえば、と、ある噂を思い出す。―”羽柴理久と目が3秒合うと殺される”…

「なーに言ってんの、長…崎。理久もおっかない顔しないで―」
「だって、そういうウワサだし。長と崎の間を空けるな」
ゴニョゴニョと小声で蒼井に何か言うと、今度は蒼井の口が開かれる。
「理久、こっち向いて」
言われるがままに顔を蒼井のほうへ向けると、無言でじっと目を見つめてきた。俺も別に、逸らそうとはしなかった。
「……はい、3秒経過。
ね？ただの下らない噂でしょ？」

「うっ、あ、あぁうん…」
チャラ男は言葉に詰まり、目をキョロキョロさせると「じゃーな、また…」と言って足早に逃げて行った。普通こうやって、俺には関わらないようにするものなのだ。普通は。
蒼井と星村風華が異常なだけで。
「理久ー、長野は別に悪い奴ではないんだよー……。ただ、ちょーっと噂を本気にするとこがあって、純粋なだけなんだよー」
「いや、特に気にしてないからいい。―名前、長崎だったと思う」
「……え。」
周囲が段々と賑わってきた。
「おーい！蒼井ーちょっとこっち来てくんね？」
遠くの席から、また違う奴が蒼井に手招きする。
「あー……うん。いま行く―。あ、そだ。理久、」
突然細長い人差し指が目の前にやってきたかと思うと、そのまま軽く眉間をつつかれた。
「…なんだよ」
迷惑そうに顔をしかめる俺に、蒼井は「だめだめ」とおどけたように首を振って見せる。
「眉間にシワ寄せて睨むの止めたらいいと思うんだよねー。気ぃ張ってさ、疲れちゃわない？じゃ。」
ぼやくように言って去る。……シワ？
前にも言われたような。
意識してるつもりはないが、他人がそう言うなら確かなのだろう。

時間も時間なので、続々と人が集まってくる。
「わー……、羽柴また怪我してる。喧嘩かな」
ぼそぼそと聞こえてくる話し声を、俺はことごとく無視した。
……だからいいって言ったのに。
昨日殴られた所は、今朝にはもうすっかり腫れは引き、赤くなって

いるだけだった。それを、母が無理矢理シップを貼ったのだ。

「――ねぇねぇ！

蒼井くん劇出るんでしょ？魔法使い、だっけ。

当日みんなでさ、一緒にその衣装着て写真撮ろうよ！！」何人かの女子が蒼井に詰め寄っている。

「えー……。

面倒くさーい…」

机に肘をつき、頬杖をついている蒼井は本当に面倒くさそうだった。

だが、女子はめげない。

「そんな～！！撮ろうよ、写真。蒼井くん、絶対カッコイイって！！ね、いいでしょ？お菓子いっぱいあげるから～！！」

ぴくりと、蒼井が反応を示す。

「……お菓子？」

「うん！！模擬店色んなのあるし、きっとおいしいよ」

「へぇ……。

お菓子くれるなら、いいよ」

よっしゃ！！と、女子たちがガッツポーズを作る。

…完全にはめられてやがる。

そんなこんなで、今日も退屈な生活が始まった。

うつろう夕焼け、少年は。

「理久ってさぁ…」

昼休み。
今日も蒼井と屋上にいた。昼食を食べ終え、日の光でまどろんでいると、
蒼井が眠そうな目でこっちを見てくる。
なんだ、と言おうとすると、
「じつは、女顔だよねー。ははは」
「……あ？」
へらへら笑う蒼井を、俺は思い切り睨みつける。
「喧嘩売ってんの？」
「えーちがうってー。
なんてゆーか……褒め言葉だよ？」
「やめろ。嬉しくない」
本当に、嬉しくない。

すると突然、階段をドタドタと上る音が近づいてくる。
勢いよく扉が開き、
立っていたのは赤眼鏡のチビ女―星村風華だった。
ただ、
おかしなことに顔が青ざめている。
「……大変なのっ！！
二人とも来て！お願い！！」

表情を強張らせたまま、俺と蒼井を縋るように見つめる。一目で動揺しているのだとわかった。
「フーカ、どうかしたの？」
微妙に驚いた感じで星村風華を見る。しかし、そんな蒼井の声もあまり聞こえてないようだ。
無言で俺達の腕を引っ張っていく。
そうして着いたのは、演劇部部室だった。
開きっぱなしのドアから中に入る。

「……昼休みになって、少し小道具の整理しようと思って来たら…こうなってた」
段々と彼女は落ち着きを取り戻し、状況を説明し始めた。まぁ、現場を見れば大体の見当はついたのだが。
「うわ――、ひっど―」
目を細めて言う蒼井。
視線の先には、昨日作った物から作成途中の物まで、小道具がバラバラに破壊されていた。
それだけではない。
黒田部長が部費で買ったといういくつかのペンキ缶が、蓋の開いた状態であっちこっちで死体のように転がっていた。
中の液体は言うまでもないが、床に散らばって取り返しがつかない。
嵐が来たかのような、酷い有様だった。

ふと、劇の張りぼてに使う予定だった板に、なにかが書かれていることに気づく。
趣味の悪い、赤く毒々しい文字。

”王子　　死ね”

おそらく赤いペンキで書いたのだろう。
太く乱雑な字だった。
呆れる思いで、溜息をついた。蒼井も星村もその文字に気づいたようで、顔を見合わせた。

なんとなく、こういうことになるとは予想していた。高校入学から数ヶ月、毎日のように「面貸せ」と言って喧嘩を申し込んでくる奴ら。
そいつらが、今回俺が劇に出ると聞いて（しかも王子役）黙っているわけがなかった。
赤文字は、部室がこうなったのは俺のせいだと、明らかに示していた。
原因は、他の誰のせいでもない。そう思っている時、頭をパシッと叩かれた。
「変なこと考えてるんじゃないでしょうね？
この原因があんたでも、悪いのはやった人なんだから。それに！！王子に死なれちゃ私が困るの！
もちろん、今から劇辞めるとか言っても辞めさせないし、何がなんでもステージに立つからね！！」
星村風華は威勢よく言い放つ。横に立つ蒼井は微笑を浮かべ、続けて口を開く。
「元気だねぇーフーカ。
とりあえずー、片しとく？」
「そうねっ、さっさとやっちゃわないと！ほら、あんたもボサッとしてないで働く！！」
二人が床の掃除を始める。不思議でしょうがなかった。なんで……
「なんでそんなに頑張るわけ？このまま俺が王子やったら、またこういうことされるかもとか、辞めたほうがいいんじゃないかとか、思わないのかよ」
「まーたそんなこと言って！！そんなの、劇やりたいんだからに

決まってるでしょ！？」
真っ直ぐに俺を見据える、赤眼鏡の奥の瞳が光った。とても簡単な答えに唖然とする。
唖然として、どういうわけか清々しかった。
縺れた糸がスルスルと解けていく。そんな感じがした。

＊　　＊　　＊

「……すみませんでした」

放課後。
他の劇のメンバーが帰るのを見計らって、俺は黒田部長を呼び止めた。
相変わらず、多少怯えていたが、にっこり笑って「な、なにかな？」と残ってくれた。
「劇の…道具とかペンキ、駄目にされてたのは俺のせいです。すみませんでした」
謝らなければと思っていた。許されたいわけではないが、黙っていられなかった。
「……え？」
眼鏡の奥が真ん丸になる。
「やっぱり、俺はステージに立つべきじゃないです。またこんなことになるかもしれません…。俺、やめます」
大きく見開いた黒田部長の両目は、段々と細まり、何故か微笑みに変わっていた。
「だめ。王子役は羽柴君だ。これは変えるつもりないよ」
なぜ、
問い掛けようとすると

「…正直言うと、僕は最初、あんまり賛成ではなかったよ」
申し訳なさそうな顔だった。
「ごめん。君を偏見した。何も知ろうとしなかったんだ、僕は。君を傷つけるような態度を取ったと思う。本当に、すまなかった」
深々と頭を下げられてしまい、どうすればいいのかわからない。
「そんなこと……俺、別に傷ついてなんか、」
ない。　傷つけた覚えはあっても、傷つけられた覚えなんか。
「――ほんと、羽柴君見てると、噂は当てにならないなって思うよ」
クスクス笑いながら、「部室はちゃんと鍵掛けるし、心配いらないよ」と言って、俺を先に帰るよう促した。
「…いいんですか、本当に」
念を押したが、彼はゆるぎない表情で
「いい。羽柴君は仲間だ」
笑って言うのだった。

＊　　＊　　＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4027w/

ＡＭＥＮ―アーメン―

2011年11月9日19時22分発行